

2023（令和5）年度  
相模原看護専門学校 一般入学試験

国語

（試験時間 50 分 配点 100 点）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 解答する途中で、ページの落丁・乱丁や印刷不鮮明の箇所および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて試験監督者に知らせてください。
3. HBの黒鉛筆を使用し、訂正する場合は消しゴムで完全に消してからマークしてください。
4. 氏名を記入し、番号欄を正しくマークしてください。
5. 試験終了の合図と同時に解答を止め、鉛筆を置いてください。
6. 解答用紙は試験官の指示に従って提出してください。

問題一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夏目漱石は明治二十七年（一八九四年）暮れから翌年正月の十数日間、円覚寺で参禅した。大学を出て英語教師になっていた。このとき漱石に対してのが若き日の宗演である。この参禅体験は十六年後に書いた『門』に描かれている。

<sup>1</sup> 漱石は若いときからとらえようのない不安に悩まされていた。この不安を晴らすための参禅だったようだ。しかし言葉の人である漱石にとって、言葉の対極にある禅は手を触れえない世界だったにちがいない。不安はついに解消しなかったようだ。それどころか増殖しつづけた。いわば漱石の根源的不安であり、<sup>2</sup> 心の癌<sup>2</sup>だった。この不安こそがのちに漱石を偉大な作家に育て上げることになる。

漱石は正岡子規と同じ慶應三年（一八六七年）生まれだから、満年齢が明治の年数と一致する。漱石は東京、子規は四国松山の生まれだが、一高（第一高等学校）で出会うと生涯の友となった。しかし<sup>3</sup> 子規がその短い生涯、明治の国家主義の優等生として生きたのに対して、漱石は国家主義からの自覚的な脱落者となった。

理由としてまず思い当たるのは漱石の生い立ちである。

子規は幼くして父を亡くしたが、母八重とその実家の大原家の人々に大事に育てられた。兄思いの妹律もいて、晩年寝たきりになっても八重と律が自己犠牲的な介護をした。病気のため結婚はしなかったが、母と妹という身近な二人の女性に愛されているという自覚が、どれほど子規に自信を与えたか。この二人の愛情が子規を大地に根づかせた。いわば日本古来の母権社会に子規は生きていた。これが子規を <sup>a</sup> 無<sup>a</sup>ジヨウの楽道家にし、「明治の子」としてまっすぐに歩ませることになる。

一方の漱石は子規とは反対に母のぬくもりを知らず育った。六人兄弟の末っ子に生まれ、母親の乳が出なかつたので生後すぐ里子に出される。ところが里親が漱石を<sup>ざる</sup> 筥に入れて夜店にさらしているのを、実家が見るに見かねて引き取った。その後、また養子に出され、漱石が実家に戻ったのは九つのおきだった。

漱石の小説の美しいヒロインたちがときに冷ややかで意地悪な印象を <sup>b</sup> タダヨ<sup>b</sup> わせるのは、そのせいではないか。母親は人生で最初に出会う女性である。子ども時代に母親と縁が薄かったことが、漱石に女性への <sup>c</sup> カイ疑<sup>c</sup> を植えたのではないか。漱石に生涯つきまとう不安の根源はここにありそうだ。

しかし漱石を明治の脱落者にした決定的な要因はロンドン留学だった。そこでの挫折が漱石を国家主義とは別の位置に立たせ

ることになる。漱石は明治三十三年（一九〇〇年）から二年間、ロンドンに留学する。明治政府は文明開化策の <sup>d</sup> 一カンとして欧米の優れた学者を日本に招き入れる一方、日本の有望な青年を留学させて西洋文化を学ばせた。

今と違って明治の留学は国家事業だった。漱石の留学も英語研究を目的とし、年間千八百円の留学費と三百円の留守宅手当が文部省から支給された。その年の秋、プロイセン号で横浜港を出航したとき、漱石は明治の国家的使命と期待を背負っていた。

ところがロンドンに住みはじめた漱石はたちまち壁に直面する。古来、日本の知識階級が親しんできた漢詩文と違って西洋文学はとも国家の役には立ちそうにない。つまるところ、男女情痴の話ではないか。それに気づいた漱石は大学に行かず、下宿にこもって、「文学とは何か」という大問題に取り組む。山積みの文学書を読んで <sup>e</sup> ショウ細なノートをとる。そのあげく神経衰弱になって文部省から帰国を命じられる。

漱石はロンドン留学をのちにこう振り返っている。

倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬の如く、あはれる生活を営みたり。  
(『文学論』)

「<sup>4</sup>狼群に伍する <sup>5</sup>一匹のむく犬」。自分は明治の新国家が求める「有為の人」にはなれない。ロンドン留学の挫折は明治の国家主義からの脱落を意味していた。

明治三十六年（一九〇三年）一月、日本に帰国した漱石は鬱々と過ごす。親友の子規は前年秋、すでに世を去っていた。輝かしい明治の青春は子規とともに過ぎ去り、時代は日露戦争へと動いていた。

日露戦争の最中、高浜虚子は漱石の気を晴らそうと朗読会（山会）の文章を書くよう勧めた。そうして生まれたのが最初の小説『吾輩は猫である』である。

『猫』は世の中を皮肉に眺める苦沙弥先生と仲間たちの物語である。明治の国家主義からの脱落が漱石を小説家にし、世間に距離を置いて f に構える苦沙弥先生の位置に立たせた。

漱石は小説家として一步を踏み出したときから、明治という時代を引き受けていたのである。時代を引き受けるとは同時代の

日本人の運命を自分の問題としたということである。だからこそ偉大な作家なのだ。その後、漱石は時代を炙り出す、この皮肉家の苦沙弥先生をさまざまに変奏させて名作を書きつづける。

明治四十年、漱石は東京帝国大学の講師を辞めて朝日新聞社に入る。官職を投げ出して一新聞社の社員となるなど、これも當時としては非常識な反国家的な選択だった。しかし明治の脱落者の烙印が何よりあざやかに見てとれるのは『三四郎』（明治四十一年）の一節だろう。

物語は日露戦争直後、熊本の五高（第五高等学校）を卒業した小川三四郎が東京へ向かう列車の中からはじまる。乗り合わせた四十くらいの髭の男が、日本はいくら日露戦争に勝って一等国になっても駄目だ、富士山よりほかに自慢するものは何もない、という話をするものだから三四郎は、

「然し是からは日本も段々発展するでせう」と弁護した。すると、かの男は、すましたもので、「亡びるね」と云った。

日露戦争の勝利に浮かれる日本人の頭に g 水を浴びせる髭の男は漱石その人だろう。「亡びるね」。この一言は日本がこれからたどる過酷な歴史、第二次世界大戦、広島と長崎への原爆投下、焼け跡で迎える敗戦、そして現代の末期的大衆社会の滑稽な惨状まで見透すような不気味な予言である。

6 <sup>すみれ</sup>  
菫 程な小さき人に生れたし

漱石

明治三十九年（一九〇六年）、日露戦争の翌年の作。漱石の心の奥に鬱々と眠る夢を取り出したような句である。小さな菫の花とは <sup>7</sup> 明治の国家主義から外れた漱石のささやかな理想だった。

（長谷川 權『俳句と人間』より）

問一 傍線 a～e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は a 〓  ・ b 〓  ・ c 〓  ・ d 〓  ・ e 〓  。

a  
無ジヨウ

④ ③ ② ①

④ ③ ② ①

④ ジヨウ識を覆す。  
③ 物価がジヨウ昇する。  
② 体のジヨウ態がよい。  
① 権利をジヨウ渡する。

b  
タダヨワせる

④ ③ ② ①

④ フン争を調停する。  
③ 素リユウ子を観測する。  
② 水中をフ遊する。  
① 海をヒヨウ流する。

c  
カイ疑

④ ③ ② ①

④ 過去をカイ恨する。  
③ 再カイを期す。  
② カイ中電灯で照らす。  
① 廃品をカイ収する。

d  
一カン

④ ③ ② ①

④ カン境を保全する。  
③ 収益をカン元する。  
② カン光客を増やす。  
① カン職に追いやられる。

e  
シヨウ細

④ ③ ② ①

④ 定理をシヨウ明する。  
③ 文献をシヨウ訳する。  
② 作者は不シヨウである。  
① 残りは僅シヨウである。

問二 傍線1「漱石は若いときからとらえようのない不安に悩まされていた」について、筆者はその原因をどのように推察しているか。次の中から最も適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は  。

- ① 円覚寺の参禅体験で不安を解消できなかったこと。
- ② 国家主義からの自覚的な脱落者となったこと。
- ③ 子ども時代に母親と縁が薄かったこと。
- ④ ロンドン留学で壁に直面したこと。

問三 傍線2「心の癌」に使われている修辞法を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は  。

- ① 直喩
- ② 隠喩
- ③ 擬人法
- ④ 風刺

問四 傍線3「子規がその短い生涯、明治の国家主義の優等生として生きた」について、筆者はその理由をどのように考えているか。適切でないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は  。

- ① 幼くして父を亡くしてしまったから。
- ② 母と妹が自己犠牲的な介護をしたから。
- ③ 日本古来の母権社会に生きていたから。
- ④ 母と妹の愛情が明治の子として歩ませたから。

問五 傍線4「狼群」・傍線5「二匹のむく犬」は何を指しているか。それぞれ適切なものを一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は傍線4  ・傍線5  。

- ① 漱石      ② 子規      ③ 英国紳士      ④ 明治の新国家

問六 空欄  ・  に入る語をそれぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。解答番号は  ||  .

||  .

- ① 直      ② 上      ③ 左      ④ 斜

- ① 呼び      ② 冷や      ③ 撒き      ④ 打ち

問七 傍線6 「葦程な小さき人に生れたし」の季節はいつか。次の中から適切なものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答

番号は  .

- ① 春      ② 夏      ③ 秋      ④ 冬

問八 傍線7 「明治の国家主義」について、夏目漱石との関係を踏まえて説明するうえで適切でないものを一つ選び、記号をマ

クしなさい。解答番号は  .

- ① 欧米の優れた学者を日本に招き入れること。  
 ② 同時代の日本人の運命を自分の問題としたということ。  
 ③ 日本の有望な青年を留学させて西洋文化を学ばせること。  
 ④ 明治の新国家が求める有為の人になること。

問九 本文中で書かれている夏目漱石について適切でないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 15。

- ① 『三四郎』には第二次世界大戦の敗戦と現代の惨状を見透すような不気味な予言が書かれている。
- ② 漱石は国家的使命をになって留学したが、西洋文学の中心が恋愛小説だったので大学に行かなかった。
- ③ 明治の国家主義からの脱落が、時代を炙り出す小説を書かせる原動力となった。
- ④ 漱石は東京帝国大学の講師を辞めて朝日新聞社に入り、反国家的な記事を書くことを選択した。

問十 次の作品群の中から、夏目漱石の著作を選び、記号をマークしなさい。解答番号は 16。

- ① 『金閣寺』 『潮騒』 『豊饒の海』
- ② 『小僧の神様』 『和解』 『暗夜行路』
- ③ 『それから』 『夢十夜』 『明暗』
- ④ 『春琴抄』 『刺青』 『細雪』





問題二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「しぐさの日本文化」という総題をかかげながら、少々矛盾したことをここで言うようだが、日本人のしぐさの一つの特徴は、しぐさ、身振りがほとんど見られない、貧弱である、あるいは抑制されているということである。目だった身振りが無いというのが、日本人の身振りの一特徴なのである。

私は電車などに乗ると、そこでしゃべっている人の身振りについ注目してしまう。結論は、目だった身振りが無いということである。ところが先日、電車の中でふと気づくと、前にすわった中年婦人ふたりが、身振り手振りにぎやかに話している。A を突きだし、それをひるがえし、それを自分の B に持って来……、とにかくにぎやかなのである。私は C を見張って注目していた。日本人もこのように変わってきたのか。うかつにも初めはそう思ったのだ。しかし、しばらく見ていると、どうも彼女らの話しているのは日本語ではないらしい。らしい、というのはそばへ行つて聞き D をたてるほど無遠慮にはなれなかったわけで。だから確かなことではないが、彼女らは中国人のようであった。

とにかく、その時私は「やっぱり」というがっかりしたとも安心したともつかぬ妙な 感<sup>a</sup>ガイにとらわれた。 や<sup>1</sup>っぱり、日本人の身振りは貧弱なのだ。

その代わり——いけばな、がある。

——と言つては トウ突に過ぎるだろうか。

\*

いけばなは、日本人の身振りの転換したものである。 イ論<sup>c</sup>があるかもしれないが、私はそう思っている。床の間のいけばなを見ると、私はそれをいけた女性の、ふだんは表現しようと思つても表現できない微妙な彼女のしぐさをそこに見るのである。あるいはそこに「読む」のである。

女性は美しい（ということになっている）。女性自身、女性は美しい（ということになっている）ことを知っている。ここまではおそらく万国共通である。日本での特異性は、そのことを誇示してはかならずしも「美しく」はなくなるといふ点にある。

「これ見よがし」に鼻にかけては、美しいものも美しいと見られなくなる。

<sup>d</sup> ヨウ貌や化粧や着物の柄や着つけについてはここでは省く。問題は動作である。身のこなしである。それはなるべく目だたず、控え目なのが良いとされる。なぜ控え目がよいのか。誇示をきらい遠慮を良しとする文化の中にひたされているからである。

こんなこと、言ってみれば当たり前のことだが、たとえば自分の美を「ひけらかす」習慣の西洋婦人の中に遠慮がち、フシ目がちな日本女性を置いてみると、まことに「いじらしい」ほどである。よほど「日本人ばなれした」女性でも、やはりそうなのである。だいいち、目立った身振りというものがない。あるのは、身振りではなく、かすかな「しぐさ」なのである。それは外国人の目にはほとんどとまらぬほどの、かすかで優美なしぐさである。

\*

私はこれまで「身振り」<sup>3</sup>と「しぐさ」とをほとんど同一視して「身振りやしぐさ」と言ってきたが、じつはわが国では「身振り」は「大きな身振り」であり「しぐさ」は「優いしぐさ」なのである。身振りとは抑制のないゼスチュアであり、しぐさとは抑制のきいたゼスチュアである。

いつだったか、料理屋の茶室ふうの部屋で年配の仲居さんが一座の客にお酌するその「しぐさ」におどろいたことがある。彼女は四、五人の客に一度にお酌しなければならぬ。といって、あちこち、身体を動かすことはできない。狭い茶室であった。彼女は坐ったまま心持ち身体をかたむけ、次の客にお酌していった。かたむく身体は左手でささえる。その左手は何本かの指でささえられている。その指づかいの「優いしぐさ」に私は不覚にも心動かされた。その女性の、そのしぐさを私は美しいと思ったのである。

指で身体の重みをささえるそのしぐさは、おそらく無意識の、そしてやむをえない動作であった。そこに「優しさ」のにじんでいるとき、心が動かされる。「やむをえない」「無意識」が、しかも「文化の型」にのっとって表現されるとき、私たちはこれを「優いしぐさ」として認めるようである。

無意識の、やむをえないしぐさと「文化の型」というものがどう関わっているのか、これはやがて、日本の踊りや所作事の分析として話をすすめてゆかねばならぬことであるが、今は、少し、脱線しすぎたようである。今のところ、大きな身振りは禁

じられている。少なくとも美的に禁じられているということを確認しておけばよい。

\*

身振りはやはり「優しいしぐさ」でなければならぬ。ところで、もう一つ、<sup>4</sup>身振りが肉体をはなれて他の対象に「転移」されれば、それはそれで美しいと認められるのである。私はいけばなのことを言っているのだ。

西洋人も草花を花びんに投げ入れておくことを好む。西洋の女性も、自分の美を花の美になぞらえることを好む。自分がバラの花であったり、かれんなフリージアの花であったりする。しかし、日本のいけばなのように、たとえば梅の枝を剪り、曲がりにくい枝をたわめ、そこに微妙な感情表現をこめるということは絶えてしない。彼らは、そのような表現は、顔で、身体で、手で、するであろう。

美を誇示することは私たちにははしたなく思われる。それはナマの自我の表現であり、誇示である。それに対し、自分を一本の梅の枝にたとえ、そのようにして「客観化」された「自分」を、さらにもう一度「自分」の目で、<sup>5</sup>ためつすがめつ手を加え、ある形にまとめあげる。それは、抑制のきいた自分を文化の型の中で客観化し、美に仕上げてゆく過程である。

いけばなは、(文化の型にひたされる、という意味での)<sup>6</sup>社会化された自分の表現である。とりわけ、社会化されることで初めて許される「身振り」の表現なのである。「集団的個人」「個人的集団」という、初めにふれたあいまい領域、——習俗がまさにそこに根を下している領域での、これは芸術なのである。だから、西洋風にいえば芸術であるにもかかわらず、——日本風にいえば、芸ごとであるからこそ、才能の有無にかかわらず、<sup>7</sup>猫も杓子もいけばなを習いに行く。また、習いに行けるのである。

いけばなの「身振り」は静的である。何かの激しい動きは過去に、つまり表現以前にあったのであろうが、今は、ぴたりと「ある型」にはまって静止している。目に見えぬ動きは、枝から枝へと走り、やがて先端にいたってぴたりと止まっている。この緊張をはらんだ静寂のうちに、私たちは、末梢(ディテール)に至ってはじめて全体を感覚的にまとめあげるといふ日本文化の一つの型を見出す。

細部における入念な手入れ、洗練。それは時には全体の見通しの悪さをもたらす。植木職人の造園設計にも、この特徴はのこっ

8 ている。全体から部分にいたるのではなく、部分から全体へ。身体のごぎの美学にしても、全体をまとめる身振りではなく、洗練された細部であるしぐさに私たちの関心は向かうのである。

(多田 道太郎『しぐさの日本文化』より)

問一 空欄 A に入る語を次の中から一つずつ選び、記号をマークしなさい。 解答番号は A

B 18 C 19 D 20

- ① 耳
- ② 胸
- ③ 手
- ④ 目

問二 傍線 a～e のカタカナと同じ漢字を使うカタカナを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選び、記号をマークしなさい。 解答番号は a 21・b 22・c 23・d 24・e 25

a 感ガイ

- ① ガイ略を説明する。
- ② 気ガイに満ちている。
- ③ ガイ事に通じている。
- ④ 生ガイの友に会う。

b トウ突

- ① 遣トウ使を廃止する。
- ② 製トウ工場を見学する。
- ③ 全体をトウ御する。
- ④ 有資格者に該トウする。

c イ論

- ① 一イ帯水
- ② 一イ専心
- ③ イ心伝心
- ④ 大同小イ

d ヨウ貌

- ① ヨウ望を述べる。
- ② 周到にヨウ意する。
- ③ 内ヨウを証明する。
- ④ ヨウ式を整える。

e フし目

- ① 小説のフク線を読む。
- ② フ遇な人生。
- ③ 広く流フする。
- ④ 博識を自フする。

問三 傍線1「やっぱり、日本人の身振りは貧弱なのだ」から、筆者が確信している内容を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 26。

- ① 目だった身振りが無いことよって、相互理解に支障をきたす文化の型があること。
- ② 日本のいけばなは、枝を剪り、たわめ、そこに微妙な感情表現をこめないこと。
- ③ 外国人の目にはほとんどまらぬほどの控え目なしぐさのいじらしさがあること。
- ④ 日本の踊りや所作を分析すると無意識の文化の型が関わっていることがわかること。

問四 傍線2「これ見よがし」の意味に相当する語を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 27。

- ① 得意
- ② 派手
- ③ 謙虚
- ④ 注目

問五 傍線3「『身振り』と『しぐさ』」の説明として適切でないものを一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 28。

- ① 身振りは大ききでしぐさは優しい。
- ② 身振りは目立つがしぐさはかすかだ。
- ③ 身振りは誇示するがしぐさは微妙だ。
- ④ 身振りは西洋婦人の動作だがしぐさは日本女性の動作だ。

問六 傍線4「身振りが肉体をはなれて他の対象に『転移』され」ることの具体的事例を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 29。

- ① いけばな
- ② 踊り
- ③ 茶
- ④ 造園

問七

傍線5「ためつすがめつ」の意味に相当する語を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 30。

- ① 自負
- ② 入念
- ③ 精密
- ④ 客観

問八

傍線6「社会化された自分」を説明している内容を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 31。

- ① 公共空間の中で個人の主体性を失わず、付和雷同的な立場に身を置かないこと。
- ② 自分を梅の枝にたとえ、もう一度自分の目でそれに手を加えて客観化すること。
- ③ 集団的個人・個人的集団という領域の中で、芸術を表現できるということ。
- ④ ナマの自我の表現をはしたなく思うことで、他者との協調関係を築けること。

問九

傍線7「猫も杓子も」の意味に一番近い四字熟語を次の中から一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 32。

- ① 万物流転
- ② 衆人環視
- ③ 老若男女
- ④ 一視同仁

問十

傍線8「洗練された細部であるしぐさに私たちの関心は向かうのである」について、本文で具体的に示されている事柄を一つ選び、記号をマークしなさい。解答番号は 33。

- ① 電車の中で身振り手振りにぎやかに話している中年婦人ふたり。
- ② 自分の美をひけらかす習慣の西洋婦人の中で遠慮がちな日本女性。
- ③ 料理屋の茶室ふうの部屋で指で身体の重みをささえてお酌をする仲居さん。
- ④ 曲がりにくい枝をたわめ、ぴたりと「ある型」にはまって静止しているいけばな。

《以下余白》